

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號二·一第 卷八十五第

---

高田博士還曆記念論文集

---

行發月二年九十和昭



上」と尋ぬるに及んではじめて、「これを教へん」(同上)といひ、子貢の政を問ふや、「食を足らはし、兵を足らはし、民をして信あらしめよ」(蘊淵)と對へる。これによつてこれをみれば、孔子は、まづ物質生活を確保し、經濟を整齊して、しかる後に禮教講すべく、徳化興すべしとするもので、物質生活の重要不可缺なることを識認肯定してあますなきに近きを知る。

いま、こゝに、われゝの問題とする變が丘の法師も、もとより佛道の歸依者なれば、厭世思想を把持し、「いかにしてなくさむ物をよの中をそむかてすくす人にとはくや」(家集)と詠んだり、または、「げにはこの世をばかなみ、かならず生死を出んと思はんに、何の興ありてか、朝夕君につかへ、家をかへりみるいとなみのいさましからん」(徒然草第五十八段、以下單に段數のみ記す)と述べたり「一言芳談」とかいふ本に「後世を思はん者は、糶杖瓶ひとつも持つまじきことなり、持經本尊にいたるまで、よきものをもつよしなきことなり」(第九十八段)といひあるを「心にあひて覺えしことども」(同上)といつてもゐるが、また、たとへば、「應長のころ、いせの國より、女の鬼になりたるを、ゐてのほりたりといふことありて」(第五十段)京白川の人々これを見んとて大騒せしに、鬼は見えず、「そのころおしなべて二三日人のわづらふこと」(同上)ありしを、「かの鬼のそらごとはこのしるしを示すなりけり、といふ人もはべりし」(同上)と評し、あるひは、「赤舌日といふこと、……このころ何ものゝいひ出て、いみはじめけるにか、この日あること末とほらすといひて、その日いひたりしこと、したりしことかなはず、得たりし物はうしなひ、企てたりしことならずといふ、おろかなり、吉日をえらびてなしたるわざの、末とほらぬをかぞへて見んも、又ひとしかるべし、……吉日に惡をなすに必ず凶なり、惡日に善をふこなふにかならず吉なりといへり、吉凶は人によりて日によらず」(第九十一段)などと論するほど、しかく知性すべれた彼

において、この物質生活の重要不可缺性を識認肯定せぬはずはないと考へざるを得ぬものがあるのであるが、はたして彼は、世をすて、「山林に入ても飢をたすけ、嵐をふせぐよすががなくは、あらぬぬわざなれば、おのづから世をむさぼるに、似たることもたよりにふれば、などかなからん、さればとてそむけるかひなし、さばかりならば、なじかはすてしなどいはんは無下のことなり、」(第五十八段)と説き、すゝんでは、「人の身に、やむことを得ずして、いとなむところ、第一に食物、第二に着物、第三に居所なり、人間の大事この三に過ず、飢す寒からず、風雨に犯されずして、しづかにすぐすを樂とす、たゞし、人皆病あり、病に犯されぬれば、そのうれへ忍びがたし、醫療をわするべからず、藥をくはへて、四のこともとめ得ざるをますしとす云々」(第二百十三段)と述べたり、「食は人の天なり、よく味を調へ知れる人、大なる徳とすべし、つぎに細工、よろづの要多し、この外のことども、多能は君子のはづるところなり、」(第二百二十二段)と説く。その物質生活の重要不可缺性を識認肯定することいたれりつくせりといふべきであらう。

なほ、こゝに、「食は人の天なり」といふは、「書經」に「それ食は人の天たり、農は政の本たり、麩實つるときは則ち禮節を知り、衣食乏しきときは則ち廉恥を忘る」とあるよりきたれるものと考へられる。思ふに物質生活の重要性の識認は、やがて、物質生活が人性に及ぼす力の偉大さの識認となり、物的存在が人類の意識を決定し、環境がその性格を規定し、その行動を制約するとする、いはゆる唯物思想に展開する可能性の強いことを認めざるを得ぬものであるが、ことにこの「麩實つるときは則ち禮節を知り、衣食乏しきときは則ち廉恥を忘る」といふは、かの人口に膾炙せる、「管子」にいはゆる「倉廩實つれば則ち禮節を知り、衣食足れば則ち榮辱を知る」(管子・牧民)と同一の思想で、この唯物思想の典型的なるものなるを知らば、この法師が、また、かゝる唯物

思想の流れをひくことあるも何ら不思議とするにあたらぬところといふべきであらうが、われ／＼はそれを彼が、「筆をとれば物かゝれ、樂器をとれば音をたてんと思ふ、盃をとれば酒を思ひ、蓑をとれば攤うたんことを思ふ、心はかならず事にふれてきたる……心さらにおこらずとも佛前にありて、ナヅをとり、經をとらば、おこたるうちにも、善業おのづから修せられ、散亂の心ながらも、繩床に座せば、おぼえずして禪定なるべし」(第百五十七段)といへるにおいてもうかゞふことができねばならぬと思ふのであるが、ことに、その「盗人をいましめ、ひがごとをのみ、罪せんよりは、世の人の飢すさむからぬやうに、世をばおこなはまほしきなり、人恒の産なきときは、つねの心なし、人きはまりてぬすみ、世をさまらすして、凍餒のくるしみあらば、科よのものたゆべからず、人をくるしめ法をかさしめて、それをつみなはんこと、不便ふびんのわさなり、云々」(第百四十二段)といへるにおいて明々白々一點疑義の餘地なかるべきであらう。けだし、これは「孟子」にみゆる有名なる「恒産なければ恒心なし、いやしくも恒心なければ、放僻邪侈なさざるなきのみ、すでに罪に陥るに及びて、しかる後從てこれを刑す、これ民をなみするなり、焉んぞ仁人位にあるありて、民をなみすることをなすべけんや、云々」(孟子・梁惠王章句上)よりひけるものであり、それは、人の性はもと善である、しかるに人が惡をなし罪に陥るは一に物質生活の不如意なるによる、故にまづその物質生活を保障して、しかる後これを善におもむかしむべきである、となすものであること改めて述べるまでもないところであるからである。

かく人が物質生活によりて支配せられ、制約せられることを認めれば、やがて、物質生活の不足のためにその性を悪化せしめられることなからしむるやうにせねばならぬと努むるにいたるべきは自然の理であらう。かくて

物質生活を豊富にすべきことが説かれねばならぬこととなる。しかるに物質生活の豊富は生産の増大にまつほかなく、生産の増大はまづ資源の開発利用にはじまる。兼好が、「陰陽師有宗入道、鎌倉よりのぼりて、尋まうで來りしが、まづさし入て、この庭のいたづらにひろきこと、あさましくあるべからぬことなり、道をしるものは、うゝることをつとむ、ほそ道一つのこして、みな鳥につくりたまへと、いさめはべりき、」(第二百二十四段)といへることを述べて、「まことにすこしの地をも、いたづらにおかんことは益なきことなり、食物藥種などをうるゑおくべし」(同上)と評せるは、まさにそこにあたるとなし得よう。

しかし、いくら資源を開発利用するといつても、その開発利用は人の労働にまたねばならず、しからば人口の増大こそまづ願はねばならぬはずであるのに兼好はそれを願はず、「子といふものなくてありなん」(第六段)といひ、また「いやしげなるもの」を並べる中に、「家のうちに子孫の多き」をあげる(第七十一段)。しからば彼は開発利用をのぞまぬかといへばかならずしもさうでもない。けだし労働の効果は労働の能率に依存する。しかるに能率の増進は、それによつて労働が發揮せられる資本に負ふところ大なるは多言を要せぬところである。しかも、當時にありては資本の役目をはたすものは役畜であつた。しかるに兼好は、「犬はまもりふせぐつとめ、人にもまさりたれば、必ず有るべし、されど家ごとに有るものなれば、ことさらにもとめかはずとも有りなん、そのほかの鳥けだもの、すべて用なきものなり、はしるけだものはをりにこめ、くさをさくれ、とぶ鳥はつばさをきり、籠に入られて、雲を戀ひ、野山をおもふ愁やむときなし、その思ひ我身にあたりて恐びがたくは、心あらん人、これをたのしまんや、生をくるしめて、目をよろこばしむるは、樂絳が心なり、王子猷が鳥を愛せし、林にたのしふと見て逍遙の友としき、とらへくるしめたるにあらず、凡めづらしきとり、あやしきけだもの、國にやし

なはずとこそ文にもはべるなれ」(第百二十一段)と禽獸を飼ふを非としながら、「やしなひかふものには、馬牛、つなぎくるしむこそいたましけれど、なくてかなはぬものなれば、いかゞはせん」(同上)と役畜だけはこれを使用することの必要を説くをみるからである。

さらに勞働の能率を増進する因子は何といつても分業にあることはいふまでもないところで、それはアダム・スミスの分業論以來みな人の知るところであるが、兼好もつとにこれを認むることは、彼が「よろづの道の人、たとひ不埒なりといへども、埒能の非家の人にならぶとき、かならずまさる云々」(第百八十七段)といひ、また、「よろづの道のたくみ、我道を人のしらするをみて、おのれすぐれたりと思はんこと、大なるあやまりなるべし、文字の法師、暗證の禪師、たがひにはかりて、おのれにしかずと思へる、ともにあたらず、おのれが境界にあらざるものをば、あらそふべからず、是非すべからず」(第百九十三段)と専門家の存在を承認し、その能率の高きを認め、これに反して何にでも手を出すときは結局ものにならぬことを諷して、「あるもの、子を法師になして學問して因果の理ことばをも知り、説經などして世わたるたつきともせよといひければ、をしへのまゝに、説經師にならんとために、まづ馬にのりならひけり、輿、車もたぬ身の、導師に請ぜられんとき、馬などむかへにおこせたらんに、もゝじりにてたちなんは、心うすかるべしと思ひけり、つぎに佛事の後、酒なとすゝむることあらんに、法師の無下に能なきは檀那すさまじく思ふべしとて、早歌はやうたといふことをならひけり、ふたつのわざやう／＼さかひに入れば、いよ／＼よくしたくおぼえて、たしなみけるほどに、説經ならふべき隙なくて、年よりにけり。」(第百八十八段)と述べ、「多能は君子のはづるところなり」(第百二十二段)といへるにおいておのづからあきらかであるとなし得よう。

しかるに分業は普通には交易においてその成就をみるべきものなることあらためて説くべくあまりに明白なるところである。すなはち、分業の下においては生産せられたる財貨は交易によりて生産者の手より消費者の手にうつり、そこにはじめて物質生活がなりたつ。それですでに分業を識認し、これを肯定する以上、兼好は、また、交易をも識認し、肯定するであらうことは、當然とするところでなければならぬと思はれるのであるが、とくに、支那との貿易において薬を輸入することをいへるがごときにおいてあきらかにそれをみとめることができよう。

交易が發達すれば、その媒介者として貨幣が出現することはいふまでもないところであり、兼好の時代、たとへば、後醍醐天皇の建武元年二月、乾坤通寶を鑄られ、銅楮并用して交易滞るなかれとの詔ありしよりみれば、當時、貨幣の行はれたること想見にかたからず、しからは、兼好はこれについていかに考ふるかとみるに、彼がある大福長者の「人の世にある自他に付けて所願無量なり、欲にしたがひてこゝろざしをとげんと思はゞ、百萬の錢ありといふとも、しばらくも任すべからず、……所願心にきざすことあらば、我をほろぼすべき惡念きたれりと、かたくつゝしみおそれて、小用をもなすべからず、つぎに錢を奴のごとくして、つかひ用ゐるものとしらば、ながく貧苦をまぬがるべからず、君のごとく、神のごとく、おそれたふとみて、したがへ用ることなかれ、……錢つもりてつきざるときは宴飲弊食をこととせず、居所をかざらず、所願を成さざれども、心とこしなへにやすくだのし」(第二百十六段)と拜錢、普錢を説けるに對して、「そもく人は、所願を成せんがためにたからをもとむ、錢をたからとすることは、願をかなふるがゆゑなり、所願あれどもかなへず、錢あれども用ゐざらんは、まつたく貧者とおなじ、何をかたのしみとせん」(第二百十七段)といふよりすれば、錢の萬能的なる事實はこれのみとむるがごときもそれをもつて單なる交換の媒介物にすぎず、それ自體として人の欲望を充足せしむる效用を



有するものにあらざることを明識せるを知る。

さきに、兼好が交易を識認肯定することはその支那貿易において藥を輸入することをいつてゐるによりて知られるといつたが、實はあの段は、「唐のものは、藥の外はなくともこと欠くまじ、書どもはこの國に多くひろまりぬれば、書きも寫してん、もろこし舟のたやすからぬ道に、無用のものどものみとりつみて、ところせくわたりもてくる、いとおろかなり、遠きものを賣とせずとも、又得がたきたからをたふとせずとも、と文にもはべるとかや」(第二百十段)とあるのであつて、藥だけが例外で、その他のものは貿易の必要なことを論ずるもので、従つて、それはむしろ貿易否定論といはねばならぬかとも思はれよう。しかし、さらに考へてみれば、それは、こちらにあるものや、不用のものは貿易するに及ばぬといふだけで、こちらになく、しかもなくてかなはぬ必要のものだけを貿易せよといふのであるから、かへつて貿易の本質をもつともよく理解把握せるものといつてよからう。ことに、その他のものも、交通機關の不充分なるが故に有用必要なものゝ輸入の妨害となるからいかにぬとするものなるにおいてなほしかりである。たゞし、こゝに、「遠きものを賣とせずとも、又得がたきたからをたふとせずとも、と文にもはべるとかや」といへるは、老子の「道德經」に、「聖人欲せざるを欲し、得がたきの貨を貴ばず」(六十四章)とか「得がたきの貨を貴ばざれば民をして盜をなさざらしめ、欲すべきを見ざれば民心をして亂れざらしむ云々」(三章)とあるによれるものと思はれる。しかるに、老子は、虚無を唱へ無欲を説き、「無欲もつてその妙を觀る」(一章)とか、「無欲にして民おのづから朴」(五十七章)とかいひ、従つて、物質生活の豊富をのぞまず、「足るを知るものは富む」(三十三章)とか「足るを知れば辱かしめられず、止まるを知れば殆

からず」(四十四章)など説き、従つて、生産の増大を願はず、分業を求めず、故に交易の必要をみとめず、むしろ自給自足を謳歌して「その食を甘しとし、その服を美しとし、その居に安んじ、その俗を樂しみ、隣國相望み、雞犬の聲相聞へ、民老死にいたるまで相往來せず」(八十章)と説くものであるから、かくのごとき思想は當然とするところであるが、いま、物質生活の豊富をのぞみ、分業を肯定し交易をみとむるとせられたる兼好においてかくのごとき思想をみるは不思議とするところでなければなるまい。しかし、よく考へてみれば、それはかならずしも不思議とするにあたらぬを知る。けだし、そも／＼兼好が物質生活の豊富を願ふとする場合、それは人の善性を擁護せんがためであることすでに説くところよりして容易に推知しうるところのごとくである。しかるに、物質生活の豊富といふも畢竟は人の欲望と相對關係にあるものなること、まことに、荷況が、「あるひは天下を祿として、しかもみづからもつて多しとなさず、あるひは監門・御旅・抱關・擊柝にして、しかもみづからもつて寡しとなさず」(荀子・榮辱篇)といへるによりてもあきらかなるがごとくである。しかるに、人の欲望は限度なく、多々益々辨する。かりに一種の物についてはいはゆる效用遞減の法則が作用して欲望満足の限界あるべしといへども、種をことにせば欲望は無限に發展して、そのとどまるところを知らぬとせねばならぬであらう。そこで物質生活を豊富にして人の善性を擁護するといふことはかならずしも、簡單にはゆかぬ。俗にも、「金持ちと灰吹きはたまるほどきたなくなる」といはれる所以である。いな、そればかりではない。物質生活の豊富それ自體が、かへつて人の善性を害ふ原因となることすらかならずしもめづらしとせぬ。成金者流が世の醇風美俗を亂すをみれば思ひ半ばにすぎるものがあらう。貧者必勝論が叫ばれる所以は、けだし、こゝにあるか。兼好も、「その物につきて、そのものを費しそこなふもの、かすをしらすあり」(第九十七段)としてその中に「小人に財あり」と

いつてこれを見とめてゐる。しからば人の善性のため物質生活の豊富なるべきを説く彼兼好が、さらに進んで、物欲の制限を説くにいたるとも何ら不思議ではあるまい。いはんや、彼が道家の思想をよるこべるは、その思想によくあらはれをるによりて知られるが、ことに「ひとり灯のもとに、文をひろげて、見ぬ世の人を友とするこそ、こよなう慰さむわざなれ、文は……老子のことは、南花の篇、云々」(第十三段)といへるにおいてあきらかであるが、その老子が、無欲を説き、知足を教へることすでに述べたるところのごとくであり、また、彼が儒家の影響をうくることすくなからざるは、また彼の思想をうかゞふものゝみとめざる能はざるところで、さきに指摘せる孟子の影響のごときは、すなはち、その一例であるが、儒家が寡欲を説くはあまりにも有名なるところで、たとへば孟子のごとき、「その人となり欲寡ければ、存せざるものありと雖も寡し、その人となり欲多ければ、存するものありと雖も寡し、」(孟子・盡心章句下)といつてをるにおいておや。さらに、いはんや。彼は佛門に入れる法師の身であり、しかうして佛道は欲念よりの解脱を説くものなるにおいておや。しからば欲望制限乃至無欲論こそ彼の本領といふべきであるかも知れぬ。では彼の欲望制限論乃至無欲論はいかにあるか。

兼好の欲望否定論をうかゞふに、さすがに法身、煩惱よりの解脱を説き色欲をいましめるをみる。いはく、「わかきときは、血氣うちにあまり、心物にうごきて情欲おほし、身をあやぶめてくだけやすきこと、たまをはらしむるにたり、美麗をこのみて費を費やし、これをすて、苦のたもとにやつれ、いさめる心さかりにして物とあらそひ、心に恥ぢうらやみ、このむところ日にさだまらず、色にふけり情にめで、行をいさぎよくして、百年の身をあやまり、命をうしなへるためし、ねがはしくして、身のまたく久しからんことをば思はず、すけるかたに心ひきてながき世がたり、ともなる身をあやまつ云々」(第七十二段)。またいはく、「世の人の心まどはずこと色

欲にはしかず、人の心はおろかなるものかな」(第八段)。しかし、また高師直の艶書代作の眞偽を問題とせられる粹法師だけに「よろづにいみじくともいるこのまざらんをのこは、いとさうくしく、玉のさかづきのそなき心ちぞすべき」(第三段)と喝破し、「匂ひなどはかりのものなるに、しばらく衣裳にたきものすとしりながら、えたらぬ、にほひには、かならず心ときめきするものなり、久米の仙人の、物洗ふ女の、はぎの白きを見て、通をうしなひけんは、まこと手足はだへなどのきよらにこえ、あぶらづきたらんは、外の色ならねば、さもあらんかし」(第八段)と色欲のおさへがたきをみとめてはゐる。

しかし、彼のいふ欲望はかならずしも色欲のみにはとゞまらぬ。しからばそれはいかにあるかといへば彼は欲望を分類して「とこしなへに違順につかはるゝことは、ひとへに苦樂のためなり、樂といふはこのみ愛することなり、これをもとむることやむときなし、樂欲うたがほするところ一には名なり、名に二種あり、行跡と才藝とのほまれなり、二には色欲、三には味なり、よろづのねがひ、この三にはしかず、これ顛倒の相よりおこりてそこばくのわづらひあり、もとめざらんにはしかじ」(第二百四十二段)とする。そしてこの第三にあげられたる欲望は則ち經濟的欲望の範疇に入るものであるが、經濟的範疇に入る欲望はひとり食のみでなく、廣く財貨に對する欲望である。そして廣く財貨に對する欲望についても兼好はこれを抑へるの側に立ち、すでに引けるところよりしてもあきらかなるごとく道家の思想をひくものといふてもよいであらうか、「大かたなにも、めづらしく有りがたきものは、よからぬ人のもて興ずるものなり、さやうのものなくてありなん」(第三百三十九段)といつてゐる。しかし物財に對する欲望に同情せぬはひとりかゝる財貨にかぎることではなく財貨一般に及び、「身死して財のこることは、智者のせざるどころなり、よからぬものたくはへおきたるもつたなく、よきものは心をとめけんとはかなし、こち

たかおほかるましてくちをし、……朝夕なくてかなはさらんものこそあらめ、その外は何も、もたでぞあらまほしき、」(第百四十段)といひ、「いやしげなるもの、あたるあたりに調度のおほき」(第七十二段)といふ。

しかしながら交易社會にありては、經濟的欲望は利に結晶し、人の欲望追求は利益追求の形において顯現するが普通である。それで欲望を否定する兼好はまた人の求利のいとなみを否定することとなる。すなはち、「蟻のごとくにあつまりて、東西にいそぎ南北にはしる。たかきありいやしきあり、老たるありわかきあり、行くところあり歸る家あり、夕べにいねて朝におく、いとなむところ何ごとぞや、生をむさぼり、利を求めてやむときなし、身をやしなひて何ごとをかまつ、期するところたゞ老と死とにあり、そのきたることすみやかにして、念々の間にとどまらず、これをまつ間まなにのたのしみかあらん、云々」(第七十四段)と評し、あるひはまた、「名利につかはれて、しづかなるいとまなく、一生をくるしむることおろかなれ、たからおほければ、身をまもるにまどし、害をかひわづらひをまねくなかだちなり、身の後には金こがねをして北斗をさそふとも、人のためにぞわづらはるべき、おろかなる人の目をよろこばしむるたのしみ、又あぢきなし、大なる車、肥えたる馬、金玉のかざりも、心あらん人はうたておろかなりとぞみるべき、金は山にすて、玉は淵になぐべし、利にまどふは、すぐれておろかなる人なり」(第三十八段)と評する。なほ、こゝに、「金は山にすて、玉は淵になぐべし」といふが、「莊子」に「金を山に藏し、珠を淵に藏し、貨財を利とせず、貴富に近づかず、云々」(天地篇)とある語を引けるものなることは人の知るところのごとくである。かくみきたれば、兼好がさきに引ける大福長者の、「人の世にある自他につけて所願無量なり、欲にしがひて、こゝろさしをとげんと思はゞ、百萬の錢ありといふとも、しばらくも住すべからず、所願はやむときなし、財はつくる期あり、かぎりある財をもちて、かぎりなき願にしたがふこと得

べからず、所願心にきざすことあらば、我をほろぼすべき悪念きたれりとかたくつゝしみおそれて、小用をもなすべからず」といへるは、その錢をいたづらに珍藏して、これを用ふることを知らざるをこそ可とするといへども、金あるにまかせて欲望を片はしより充足せんとすることを否定する點にいたりては兼好も同感ならざるべき理由をもたぬがごとく思はれると思ふがどうかであらうか。

最後に兼好はむさぼることを排撃して、「ひたすら、世をむさぼる心のみふかく、ものゝあはれもしらずなり行く」を「あさましき」(第七段)ことゝ笑ひ、あるひは、「むさぼる心にひかれ」ると(第百三十四段)「身をはづかしむる」(同上)にいたるとする。けだし、單なる欲望すら否定する兼好が、むさぼることに與せざるべきは當然すぎる當然にしてまた言を費すを要せざるべきか。

かく、欲望を制限して、欲の寡かるべきを説く兼好が、その欲望の充足、すなはち、財貨の消費について、おごりを退け、つゝましかるべきを説くは、もとよりそのところといふべきである。兼好が、「人はおのれをつまやかにして、おごりをしりぞけて、たからをもたず、世をむさぼらざらんぞ、いみじかるべき、」(第十八段)といひ、「よろづに清らをつくして、いみじと思ひ、ところせきさましたる人こそ、うたて思ふところなく見ゆれ、」(第二段)と評する所以で、最明寺入道が、平の宣時朝臣と酒くみかはすに、「こまはらけ小土器に味噌のすこしつきたるを」(第二百十四段)「ことたりなんとて、心よく數獻に及て、興に入られはべりき」(同上)といふことを讚仰し、松下禪尼が、「ものはやぶれたるところばかりを、修理して、用ることぞと、わかき人に見ならはせて、心つけんためなり」(第百八十四段)とて「すゝけたるあかりさうじの、やぶればかりを、禪尼手づから小刀して、切りまはしつ

はられけ」るを(同上)「いと有がたかりけり、世をささむる道儉約をもとす、女性なれども聖人の心にかよへり」(同上)と絶讃するはまことにそのまさにしかるべきところでなければならぬ。

といつて、兼好は消費についてはたゞ儉約さへすればよいといふのではない。たゞ儉約をつとめるといふのはやがて蓄積に通ずるであらうが、彼は蓄積などを高く評價せぬ。いな、むしろ、にが／＼しく感ずるものなることは、その、「身死して財のこることは、智者のせざるどころなり、」(第四百十段)といふにて知られよう。それでは彼の消費に對する考へ方はいかにあるであらうかといふに、たとへば、彼は、「家居のつき／＼しく、あらまほしきこそ、假りのやどりとはおもへど興あるものなれ、よき人の、のどやかに住みなしたるころは、さし入たる月の色も、一きはしみ／＼とみゆるぞかし、いまめかしくきら／＼かならねど、木だちものふりて、わざとならぬ庭の草も、心あるさまに、簀子透垣すのこすがいのたよりをかしく、うちある調度も、むかし覺えて、やすらかなるこそ心にくしとみゆれ」(第十段)といひ、「屏風障子などの繪も文字も、かたくななる筆やうしてかきたるが、見にくきよりも宿のあるじのつたなくおぼゆるなり、大方もてる調度にても、心おとりせらるゝことは有ぬべし、さのみよきものをもつべしともあらず、損せざらんためとて品なく見にくきさまにしなし、めづらしからんとて用なきことどもしそへ、わづらはしくこのみなせるをいふなり、ふるめかしくやうにて、いたくこと／＼しからず、つひえもなく、ものがらのよきがよきなり、」(第八十一段)といへるにおいてうかゞひうることく、めづらしきを貴ばず、ことやうなるを愛でず、こと／＼しきをきらひ、くだ／＼しきをさげ、いまやうを賤しみ、つき／＼しく、わざとならず、古めかしく、おちつきあり、かく意をくばりながらも、さりげなくし、しかもおもむきに乏しからず氣品を具ふるが兼好のこのみなのであるといふべく、われ／＼は、そこに、非常に高い識見と豊かな教

養にもとづく、いはゆる幽幻・わび・さびといった、高踏・繊細・簡素な趣味論をみる。そしてそれは、「花はさかりに、月はくまなきをのみみるものは、雨にむかひて月をこひ、たれこめて春の行方<sup>ゆくへ</sup>しらぬも、猶あはれに情<sup>なさけ</sup>ふかし、さきぬべきほどのこすゑ、ちりしをれたる庭などこそ、見どころおほけれ、」(第三百三十七段)と説き、「すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは(同上)といふにいたつてきはまるの感がある。しかしながらそれらの趣味論は佛道や老莊思想の影響や、當時の時代思潮よりきたる無常觀に胚胎するものであつて、日本經濟思想の特質は案外かゝるところに見出されるのではないかとも思はれる。これが詳細は遺憾ながらいまこの小稿において沈潜するのいとまをもたぬところであるが、ともかくかくのごとき趣味は、今日にありては、もつとも茶道の方にあらはれてゐるやうにいはれてゐる。しかし、そこにおいては眇たるかけ茶椀に萬金を投ずるを誇る風があり、幽幻・わび・さびはいたづらに豪奢の代名詞の觀なくもない。しかし、これはいはゞ邪道であつて、まことに「初期の茶人は、けばけばしい豪華な生活に厭氣さして、簡素な單純な生活に憧れた結果、茶の世界に使ふ、反動生活の要具として、茶器を豪奢生活の道具の間に尋常茶飯の品に求めた」(井上吉次郎、觀るもの、九九一—一〇〇頁)のであり、すくなくとも、兼好は、「つひえもなく、物がらのよきがよきなり」(第八十二段)といつてゐるのであるから今日の茶人のあるものは兼好の趣味に合はぬ輩でなければならぬ。ことに、今日、「茶人が古拙に一種の美を認めると、亞流は、拙なるものを美なりと合點する」(井上吉次郎、前掲書、九九頁)といはれるが、兼好は、すなほなるを賞へること、先に引けるところよりしてもあきらかであるが、さらに資朝卿がかたはものどもの見にくくいぶせきをみて、「たゞすなほにめづらしからぬものにはしかずと思ひて」(第百五十四段)歸へりて後植木、鉢植の類をみな掘り棄てられたるを、「さも有ぬべきことなり」(同上)といつて同感を表はしてゐるによりて一層



あきらかとなるであらう。

なほ、かくのごとき消費論が爲政の道に適用せられると、さき引けるごとく、「世をよさむる道、儉約を本とす」(第百八十四段)となり、また、「いにしへの聖の御代の、まつりごをも忘れ、民のうれへ、國のそこなはるゝをも知らず、よろづに清らをつくして、いみじと思ひ、ところせきさましたる人こそ、うたて思ふところなくみゆれ」(第二段)といふことになる。この最後に引けるところは、老子にいはゆる、「朝はなはだ除く<sup>きよ</sup>、田はなはだ蕪<sup>か</sup>れ、倉はなはだ虚しく、文綵を服、利劍を帯び、飲食に厭き、財貨餘りある、これを盜夸<sup>たうか</sup>」といふ、非道なるかな」(五十三章)とあると符節を合するがごとくであるのも面白いが、それはともかく、だから、「上のをてり費やすところをやめ、民をなで農をすゝめば、下に利あらんこと疑あるべからず」(第百四十二段)といひ、「順徳院の禁中のことどもかくせたまへるにも、おほやけのたてまつりものは、おろそかなるをもつて、よしとこそはべれ」(第二段)とあるをあげるごとくなるわけである。

以上、私は兼好法師の經濟思想を主として「徒然草」によつてうかゞつた。私はさらに進んで、これを彼の個性と結び、時代に照らしてながめたいと思ふ。しかし、こゝにはその餘裕がない。私はそれを後の機會に譲る。